

⑤昭和44年8月「県政ニュースNo.116」

【秋田博開く】 県民あげて開幕を待ち焦がれた「秋田農業大博覧会」は8月2日オープン。その前日、県北、県南、海岸コースと分かれた宣伝隊は、県内を最後のキャラバン。この日の夕方前夜祭の会場となった県民会館に着きました。前夜祭にはおよそ2千人の人が詰めかけ超満員。小畑知事のあいさつの後、自衛隊音楽隊の演奏、秋田民謡同好会、市民劇団の演ずる、ふるさと秋田。そして松竹歌劇団のサマーフェスティバルは、前夜祭ムードをいっそう盛り上げました。



翌8月2日午前9時、主会場正面ゲート前で開会式が行われました。高らかに鳴りわたるファンファーレの中で、松橋副知事が秋田農業大博覧会の開会を宣言。次いで主催者を代表して、実行委員会



会長の小畑知事があいさつ。いよいよテープにはさみが入られます。特別招待者の三船敏郎、倍賞千恵子さんといった人気俳優から子どもの代表者ら15人が、ミス秋田博の介添えでゲート前に張られた紅白のテープにはさみを入れ、秋田博の開幕を告げました。

赤、青、黄など色とりどりの風船が会場いっぱい美しい花模様を描き、そして力強く羽ばたく千羽の鳩。華麗なカラー花火の打ち上げの中を、秋田博のテーマ館「夢の田園館」

へ。本県の主産業である農林水産業の20年後の姿を想定したというこの展示様式は、ダブルイクスポジア方式という日本では初めての試みで来年の万国博に取り入れられますが、秋田博に一足早くこの新方法がお目見えしました。

「米の秋田館」は、米の利用、米の役割、農民の喜びと苦勞を描きながら、秋田米の良さをうたいあげています。同じ館内にある「酒造館」では、やまたのおろちが秋田銘酒を飲み続け、その隣の試飲コーナーでもお客が押しかけて、どんどんお酒が無くなります。“米の秋田は酒の国”のキャッチフレーズで秋田の酒造業の素顔を紹介しています。

(中略)

華やかさと夢に満ちた「秋田農業大博覧会」。政府の大事業と言われた八郎瀧干拓事業の完成と、明治百年を記念してオープンした「秋田博」。それは先人の遺産を土台に限りなく発展する、郷土秋田の未来を象徴する一大祭典ともいえるでしょう。



～ご来場ありがとうございました。～

■ 秋田県公文書館 ■
〒010-0952 秋田市山王新町14-31
TEL 018-866-8301
FAX 018-866-8303
E-mail koubun@apl.pref.akita.jp



県政映画上映会

～秋田昭和の時代 映像アーカイブ～

平成27年11月1日(日) 11:00～正午 秋田県公文書館 3階多目的ホール

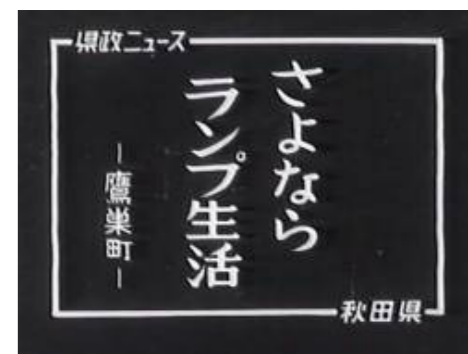
本日のプログラム

◆ ごあいさつ ◆

◆ 前半 ◆

① 昭和34年1月「県政ニュースNo.18」

- ・あけゆく1959年(ジャージー乳牛)
- ・八郎瀧干拓工事
- ・県庁舎建設工事
- ・とれたぞハタハタ(金浦町)
- ・よみがえる大地(小坂町)
- ・さよならランプ生活(鷹巣町)



② 昭和38年4月「県政ニュースNo.47」

- ・融雪期に備えて
- ・おまちどうさん～巡回こども文庫
- ・250億円を可決～予算県会終る
- ・みんなで公明選挙を



◆ 後半 ◆

③ 昭和39年2月「県政ニュースNo.54」

- ・開発進む地下資源
- ・利用される児童館(由利町)
- ・ふるさと散歩…男鹿

④ 昭和42年2月「県政ニュースNo.86」

- ・みんなで火災予防
- ・雪と戦う
- ・若い力…ボランティア

⑤ 昭和44年8月「県政ニュースNo.116」

- ・秋田博開く(秋田農業大博覧会)



～はじめに～

郷土秋田のニュース映像を5本上映!



かつて「県政映画」は、「県政だより」「県政ニュース」などの名前で、県内各地の映画館で幕あいに上映され、その時々々の県政に関するニュースや各地域の話題などを提供していました。

秋田県公文書館では、これら県政映画を保存し閲覧室で公開しておりますが、スクリーンで上映し大勢でご鑑賞いただく上映会も開催しております。

今回は、昭和44年に明治百年記念事業・八郎瀧干拓記念として開催された“秋田農業大博覧会”など、昭和30～40年代の作品5本を上映します。

どれも当時を偲ばせる貴重な映像ばかりです。懐かしい昭和の秋田をぜひご覧ください。

～ナレーション採録～ ■ナレーションの一部を採録しました■

① 昭和34年1月「県政ニュースNo. 18」

【とれたぞハタハタ（金浦町）】 冬の味覚、ハタハタの漁期を迎えて由利郡金浦漁港では、連日わか網で賑わいました。産卵のため港内に寄せてきたハタハタを直径1メートル余りの丸網ですく



い取る独特なこの漁法は、荒波の上に壮観な作業を展開します。港へ引き上げる船団、漁を気遣う岸壁の人たち。今日の漁は占めて1万貫。組合の魚置き場はハタハタで足の踏み場も無い有り様。威勢の良い浜の業者の入札が済むと直ちに箱詰めに入れ、待ちわびる消費地に向かって飛ぶように深夜の港町から運ばれて行くのでした。



【さよならランプ生活（鷹巣町）】 本県の開拓地の3分の1は、まだランプの生活を送っていますが、鷹巣駅から北東へおよそ10キロ、山と急流に囲まれた岩坂地区の開拓農家では新しい年とともに待ちあぐんだ電灯の



生活に入ることになりました。電灯工事には県と国から3分の2の補助はあるものの、ここまでこぎ着けるには大変な努力です。一戸当たり3ヘクタール、3町1反歩の雑木林と取り組んでから10年。ようやく迎えた点灯式には県や役場の人たちも顔を見せ、喜びを共にしました。

「ご苦労さん」の連発に電工さんも嬉しそう。我が家を照らす電灯に、汗とともに過ぎたひと昔の感慨がジーンと胸にきます。苦節10年、ようやく灯った文化のともしびが、これからの開拓地の発展に大きな希望と力を与えてくれることでしょう。



② 昭和38年4月「県政ニュースNo. 47」

【おまちどうさん～巡回こども文庫】 鹿角りんごで知られている花輪町柴平に、1台のジープが訪れました。これは「警察こども文庫」を運ぶ車です。本屋さんもない不便な地方の子どもたちの夢を育むとともに、駐在のおまわりさんと子どもたちが親しみ合えるようにと、県警察本部が5年前からやっているもの。約150冊の本が1組となって、全部で11組が県内の奥地を中心に廻っています。待ち焦がれていた小さなお客さんがどっと押し寄せ、貸し出しに大あらかわ。読みふける子どもたちの夢は無限に広がり、軒下の淡い日差しが山里の春を呼んでいるようです。



③ 昭和39年2月「県政ニュース No. 54」

【利用される児童館（由利町）】 子どもを健やかに育てようと県が全国にさきがけてつくった児童館はいま県内に26ありますが、幼児の保育、子ども会の集会場として地域の人たちに利用され喜ばれています。これはその一つで、由利郡由利町の前郷児童館。午前中は3歳から6歳までの幼児を70人も預かっています。さっきまでのやんちゃ坊やも、おやつの中にはかわいい配膳係です。午後は学校から帰った子どもたちが集まってきます。勉強の予習をする子、また備え付けの文庫を読む子と、さまざまです。遊戯室では子ども会リーダーのおじさんから、楽しいゲームを教わっているところ。こうして、親の目の届かなかった放課後の心配も無くなり、児童館は日の暮れ



るまで良い子たちの明るい声でいっぱいです。子どもたちで賑やかだった児童館も、夜は母親クラブの生け花教室に早変わり。一方、児童館の運営に当たっている市町村でも、随時会議を開いては適切な運営方法について話し合っています。子どもたちの楽しい集会場として誕生した児童館は、県民に広く親しまれていくことでしょう。

④ 昭和42年2月「県政ニュース No. 86」

【若い力…ボランティア】 最近本県でも、青年社会事業ボランティアの活動が活発になってきました。いま県内で活躍している会員は約千人いますが、その職業も会社員から高校生、銀行員などいろいろで、年齢も18歳から25歳までと若い人がほとんどです。ボランティアとは、もともと各自が余暇を利用して能力に応じて無報酬で社会に奉仕することで、会に参加している若い人たちは子ども会や児童施設を回って子どもたちと一緒に遊び、また良き話し合い手となって不良化を防いだり、鍵っ子を救済するなど社会奉仕的な面で活躍をしています。子どもたちと一緒に遊んで遊ぶ会員たち、彼らは子どもたちを楽ませるために一生懸命に努力しています。各地域で、児童健全育成の協力者として、また社会福祉活動の奉仕者として、この若い会員たちは明るい社会の建設に大きな役目を果たしているのです。